



次の世代の人たちに、
良い会社、良い社会を残していこうと
いうことが、今生きている我々が
果たすべき役割です。

加藤産業グループの在り方

当社の社是にある「周囲の人々」とは、株主・従業員とその家族・得意先・仕入先、さらに当社の製品を受用してくださる消費者等、利害関係を共にする全ての人々であると表明しています。中でも、顧客がいなければ会社は成り立たず、従業員がいなければ顧客の創造もできないという意味で、顧客と従業員の両輪が重要であると考えています。

ステークホルダーの方々に、グループミッションにある“豊かな食生活”を送っていただくため、加藤産業グループがどのような存在であるべきかを考えると、企業は「人の集まり」であることから、企業を構成する従業員一人ひとりが正しく生きるとともに、人が正しくあることに親和性をもつ会社である必要があるでしょう。

グループミッションと 4つのマテリアリティのつながり

食品卸売業を中核事業とする会社として、また、「豊かな食生活を提供する」というグループミッションを掲げた会社として、4つのマテリアリティである「脱炭素」「フードロス&ウェイスト」「資源循環」「多様な人財の活躍」は、実施できること、実施するべきことだと思っています。「食」を基盤として捉えているグループミッションを達成するために、これら4つのマテリアリティは必要不可欠なパーツだと言えます。これらの全てにおいて、持続可能性を維持していかなければ、会社としての発展も、社会としての発展も不可能となるでしょう。

「食」の持続可能性を考えると、気候変動の問題は待ったなしの状況に来ており、我々の「食」の基盤を脅かしています。「食のインフラ」としての役割を考えたときも、現状のような天災が頻発している状態が続くと、様々なコストが上がっていき、持続可能ではないため「脱炭素」は大きなテーマとして実施しなければいけないと思っています。

「フードロス&ウェイスト」についても「食」の持続可能性を考えると、無駄を出しつづけることは持続可能ではありません。グループミッションとして掲げている以上は、天の恵みである「食」を大事にしていくことは当然のことだと思っています。

「資源循環」も同じように、循環型にすることにより、グループミッションを達成するために我々が掲げている3つのビジョンのうち「食の

インフラになる」は、世の中の循環の方法を変えていける立ち位置にあると思っています。当然我々だけでできることではないですが、卸売業はサプライチェーンの中心で周りを幅広く見える立ち位置であるため、大きなテーマとして捉えています。

「多様な人財の活躍」については、特に日本国内の人口が減っていくなかで、人財をどのように活用していくかは経営の観点からも重要です。価値観は、社会の変化の流れの中で変化するので「良い」という言葉の意味は変わっていくだろうと思いますが、「良い会社、良い社会」というのは、それぞれ自分の役割を果たしながら、それぞれの価値観で働いていけることが重要なことだと思っています。

サステナビリティの 取組みの推進に向けて

20年後の未来に必要とされるものは、今我々が想像するよりも高いレベルのものになるでしょう。生き方は、人それぞれの価値観で決まってくるので、それに伴い世の中のコンセンサスも変わってきています。世代交代も含め、コンセンサスが変わってきていることに我々が感度を持ち、社会の変化と同じスピード感で変わるか、我々のやり方を変えていけるかということがポイントだと思います。社会全体としてもそうでしょうが、社内でも昔の価値観を持つ人はまだまだ多いと思うので、社会の変化に対する感度を高めていかなければいけないと思います。一人ひとりが当事者としての意識を持たないと変わらないことがほとんどです。そのため、一人ひとりが社会の変化を我が事として捉え、個人として、また組織の一員として自分なりにできることを行動に移すことで、グループミッションの達成に近づいていけるでしょう。

当社にとってのサステナビリティは良い会社、良い社会を作っていくことだと思っています。会社としても個人としても次の世代の人たちに、良い会社、良い社会を残していこうということが、今生きている我々が果たすべき役割です。これは当社の経営信条である「蓄積の精神」にもつながります。この気持ちを持って取組みを進めていけば、様々なことがモチベーションとなり、取組む意欲が高まるのではないかと考えています。

代表取締役社長 **加藤和弥**